

実践のまとめ（第4学年 外国語活動）

新発田市立東豊小学校 教諭 園部 敬祐

1 研究テーマ

英語の文字への興味・関心を高め、音声から文字への円滑な接続を目指す指導の工夫

～体験的な学びの蓄積の可視化を通して～

2 研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編）では、中学年の外国語活動の導入について、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」と述べられている。

小中連携という側面では、平成20年度の学習指導要領改訂により、小学校から外国語教育を行うことで、「児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている」とある。一方で、「音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない」等の課題も見られた。

このような成果と課題を踏まえ、中学年の外国語活動では、『聞くこと』『話すこと』を中心とした活動を通して外国語に慣れ親しみ、（中略）高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を『読むこと』『書くこと』を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視する」としている。

しかし、これまでの高学年での指導を振り返ると、中学年で慣れ親しんだアルファベットであっても、高学年において教師やALTが発音するアルファベットを正しく認識できていない児童が多く、音声から文字への学習に円滑に接続されていない状況が見受けられた。その原因の一つとして、中学年における音声としてのアルファベットの慣れ親しみが十分ではないと考える。そこで、第4学年「アルファベット」の、「聞くこと」「話すこと」における体験的な活動を充実させ、十分なインプット量を確保することで、音声から文字への学習への円滑な接続を目指したいと考え、本研究テーマを設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

① 体験的な活動を通して、アルファベットに慣れ親しませる

中学年は、授業を通して英語に初めて触れる段階であることから、児童がアルファベットに対して興味・関心を高められるよう、身の回りに英語の文字が多く存在することに気付かせ、楽しみながら慣れ親しませるような活動を取り入れる。体験を通して言語に対する興味・関心を高めることで、言葉の大切さや豊かさ等に気付くことに繋がると考える。

また、塩川(2020)は、「音と文字をつなぐ活動を取り入れたことで、児童の『読みたい』『書きたい』という興味・関心を高めることができた」と述べている。これを踏まえ、アルファベットの文字の音韻認識と形状認識を結び付けることを目的とした、アルファベットクイズを継続して行い、音声から文字への円滑な接続を目指す。

② 振り返りによる学びの蓄積の可視化を通して、学習意欲の向上へ繋げる

単元の目標に照らして、毎時間自分の学びを振り返る場を設定する。その際、児童自身が授業を通して、どのアルファベットについて理解を深めることができたか、視点を与える。具体的には、授業終末の振り返りで、その時間に学習したアルファベットを一覧から選び、選んだ理由を記述させる。これを記録として残し積み重ねることにより、学習が進むにつれて学びが蓄積されていることを可視化し、学習意欲の向上に繋げたい。

(3) 研究テーマに関わる評価

以下の2つの観点から評価を行う。

- ① 実践前後でアルファベットの音に関する選択問題を実施し、正答率の変容により音声によるアルファベットの理解度を見取る。（小テスト）
- ② 振り返りの記述や実践後アルファベットの小文字に関するアンケートから、学びの蓄積を実感する旨の回答をした児童数の変容を見取る。（アンケート）

3 単元と指導計画

(1) 単元名

Unit6 : Alphabet アルファベットで文字遊びをしよう (Let's try!2 文部科学省)

(2) 単元の目標

- ・身の回りには活字体の文字で表されているものがあることに気付き、活字体の小文字とその読み方に慣れ親しむ。
- ・身の回りにあるアルファベットの文字クイズを出題したり答えたりする。
- ・相手に配慮しながら、アルファベットの文字について伝え合おうとする。

(3) 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	アルファベットの活字体の大文字・小文字を識別したり、その読み方に慣れ親しんだりしている。	身の回りにあるアルファベットについて、文字クイズを出題するために、ヒントを出題したり、質問したりして伝え合っている。	相手に配慮しながら、アルファベットの文字について伝え合おうとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画 (全5時間、本時4 / 5時間)

	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1次 (1)	・身の回りにはアルファベットで表されているものがたくさんあることに気付く。	・アルファベットクイズを解こう。	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> 本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。児童の学習状況を記録に残さない活動や時間においても、教師が児童の学習状況を確認する。 </div>
2次 (1)	・大文字と小文字の違いを比べながら、活字体の小文字とその読み方に慣れ親しむ。	・何を持っているかを尋ねる表現に慣れ親しもう。	
3次 (3) 本時2 / 3	・アルファベットクイズを作る活動を通して、アルファベットの名前を尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。 ・アルファベットクイズを通して、相手に配慮しながらアルファベットの文字について伝え合う。	・アルファベットさがしをしよう。 ・何を持っているかを尋ねたり、答えたりしよう。 ・アルファベットクイズをしよう。	知・技 アルファベットの読み方を聞き、対応する小文字を選んでいく。 【行動観察】 知・技 アルファベットクイズを通して、アルファベットの正しい発音に慣れ親しんでいる。 【行動観察】 思・判・表 身の回りにあるアルファベットについて、ヒントを出題したり質問したりして伝え合っている。 【行動観察・振り返り】 態度 相手に配慮しながら、クイズに含まれるアルファベットについて尋ねたり答えたりしようとしている。 【行動観察・振り返り】

4 単元と児童

(1) 単元について

本単元は、アルファベットの小文字を見て、その名前の読み方に慣れ親しむことをねらいとしている。アルファベットの小文字は、子どもたちの身の回りにあり、日常生活の中でよく目

にしていると思われる。しかし、大文字と比べて形が似ている文字が多く、認識が難しいものも多い。したがって、活動を通してアルファベットの小文字に十分に慣れ親しませることで、文字とその名前の読み方を識別できるようにしたい。

また、児童は第3学年でアルファベットの大文字を学習しており、今回扱うアルファベットの小文字に慣れ親しむことによって、高学年の外国語科における文字の読みへの手助けに繋がると考える。

(2) 児童の実態

本学級は29名が在籍している。外国語活動全般に対して意欲的であり、協力して学習する姿が多く見られる。英語を聞くことにおいては、教師やALTの話す英語を注意深く聞き、聞き取ったことを友だちと確認したり、積極的に発表したりしている。話すことにおいては、意欲的な児童が半数近くいる一方、数名の児童は苦手意識をもつ様子が見られる。アルファベットクイズの作成を通して、聞くことから話すことへの活動に繋げていく上で、個別に問い掛ける等の支援をしながら、主体的に活動に参加できるよう配慮している。

5 本時の展開（令和5年12月11日実施）

(1) ねらい

アルファベットクイズを出題したり、質問したりする活動を通して、活字体のアルファベットやその読み方に慣れ親しむことができる。

(2) 展開の構想

本時はアルファベットクイズを通して、アルファベットの小文字の形と音について体験的に学習する。アルファベットクイズは、文房具や服、ポスターなど自分たちの身の回りにあるアルファベットに着目し、アルファベットが普段の生活の至る所に存在し、身近な存在であることを実感させることを意図している。

本時では、「教室にあるアルファベット」と範囲を限定し、題材となるアルファベットを探したり、問題やそのヒントを作ったり、出題された問題に対して質問したりする活動を通して、活字体のアルファベットやその読み方に慣れ親しむことをねらいとする。出題方法を、教師が毎時間の導入時に帯活動として出題するアルファベットクイズで、体験的に理解できるようにする。具体的には、候補となるアルファベットが映っている写真を数枚提示し、答えとなる写真に含まれるアルファベットをI have a “t”.のようにヒントとして伝える。また、児童からDo you have a “b”?のように質問できる「質問タイム」を設定し、児童がアルファベットを聞いたり、その音を発音したりする活動を設定する。教師のヒントや他の児童の質問タイムでの手掛かりをもとに、正解を目指すことで、楽しみながら活字体のアルファベットやその読み方の慣れ親しみを図りたい。

(3) 展開

時間 (分)	学習活動	◎教師の働きかけ ・予想される児童の反応	□評価 ○支援 ◇留意点
3	○挨拶	◎挨拶をする。	
7	○Small talk	◎【Small talk】身の回りにあるアルファベットのクイズを出題する。 ヒントの出題方法I have a “t”.や、質問方法Do you have a “b”?などを確認する。	◇帯活動であるSmall talkを通して、クイズの出題方法について確認する。
6	○アルファベット探し	◎身の回りにあるアルファベットを見つけて写真を撮る。	◇タイマーを設定し、時間になったら席に戻るよう指示する。
24	○アルファベットクイズ	◎ペアでアルファベットクイズを行う。 ・I have a “p”. ・I have 6 letters. ・「p」って言った? 「t」って言った? ・「p」が入っているから「pen」かな?	◇「アルファベットクイズ」「フィードバック」を、往還させながら活動を行う。 思・判・表

	○フィードバック	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6 letters だから「pencil」じゃない？ ・ Do you have an “l”? ・ Yes, I do. <p>◎ヒントや質問で取り上げたアルファベットについて、フィードバックを行ったり、問題の出題方法や答え方についての改善を行ったりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ すぐに答えが分かってしまった。 ・ 問題が難しすぎて、だれも分からなかった。 ・ 発音がうまく聞き取れなかったときは、どうすればいいかな。 	<p>身の回りにあるアルファベットの文字について伝え合っている。</p> <p>○児童から出てきた発言を板書でまとめ、確認できるようにする。</p> <p>態度</p> <p>相手に配慮しながら、クイズに含まれるアルファベットについて尋ねたり答えたりしようとしている。</p>
5	○振り返り	<p>◎振り返りを書かせ、本時で学んだことを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「t」の発音と「p」の発音が似ていることが分かった。 ・ 発音が聞き取れなかったときの聞き方が分かった。 ・ 自分たちの周りにはたくさんアルファベットが使われていることが分かった。 	

(4) 評価

- ・ クイズの回答をする際、アルファベットの読み方を聞き、対応する文字を選んでいる。
【知・技 (行動観察)】
- ・ 身の回りにあるアルファベットの文字について、ヒントを出題したり、質問をしたり答えたりしている。
【思・判・表 (行動観察・振り返り)】
- ・ 小文字クイズの作成を通して、相手に配慮しながら、クイズに含まれるアルファベットについて尋ねたり答えたりしようとしている。
【態度 (行動観察・振り返り)】

6 実践を振り返って

(1) 授業の実際 (指導の実際)

①身の回りにはアルファベットで表されているものがたくさんあることに気付く。(第1次)

Let's try!2に描かれている町のイラストを見せ、看板や標識にアルファベットが使用されていることを確認し、自分たちの身の回りにもアルファベットで表されているものがあるということを想起させた。その後、企業のロゴやお菓子のパッケージに書かれているアルファベットについて、教師からクイズを出題した。活動を通して、I have an “a”. I have 7 letters. などのヒントの出し方や、クイズの答えに含まれるアルファベットの読みを学習した。

事前アンケートの結果から、gとzなど発音の違いの理解が十分ではないものがあることが分かった。そこで、googleやamazonなどの問題を出題し、どのような発音の違いがあるか比較し考える時間を設けた。振り返りでは、多くの児童がgとzの発音の違いについて記述しており、クイズを通して発音の似ているアルファベットを比較することは、音声の慣れ親しみに有効であると考えた。

②大文字と小文字の違いを比べながら、活字体の小文字とその読み方に慣れ親しむ。(第2次)

ロイロノートのシンキングツール「Xチャート(図1)」を使い、引き続きアルファベットクイズを行った。大文字と小文字が混在しているため、児童に尋ねたり、アルファベットを指で空書きさせたりしながら、形や音声に慣れ親しんだ。また、Do you have a “b”?/ Yes, I do. / No, I don't. などの質問の仕方・答え方などを学習した。



図1「Xチャート」

③アルファベットクイズを通して、相手に配慮しながらアルファベットの文字について伝え合ったりする。(第3次)

教師のアルファベットクイズを見本にしながら、Xチャートを使って自分たちで問題を作成した。(図2)教科書に書かれている文字の他に、教室内でアルファベット探しを行い、クイズ作りに取り入れるように指示した。友だちの服や文房具、ポスターなど、様々な所からアルファベットを見つけ、クイズに取り入れる様子が見られた。その後、ペアでクイズを出し合いながら、ヒントの出し方や質問するときの表現を繰り返し確認した。最後に希望者が全体にクイズを出題した。



図2「児童が作成したXチャート」

活動を繰り返すうちに、ヒントを出題するポイントに気付いた児童が、「選択肢の中にある共通の文字をヒントに出す」と発言するなど、クイズを盛り上げるための工夫を加えている様子が見られた。

(2) 研究テーマに関わって

①実践前後のテストの正答率の比較

実践前後のテストでは、アルファベットの小文字に関する問題を14問出題した。前半7問は、アルファベットを聞いて、正しい小文字を4択から選ぶ問題(聞くこと)、後半7問は、教師が示した小文字のアルファベットについて、どの発音が正しいか2択から選ぶ問題(読むこと)を実施した。研究テーマに関する評価結果は右表のとおりである(表1)。

実践前のテスト結果「聞くこと」に関する正答率の低い問題としては、「設問2(1,e):正答率70.4%」「設問5(g,z):正答率66.7%」「設問6(1,m,n):正答率55.6%」などがあつた。似ている発音のほか、(i,e)のように、ローマ字読みと混同してしまう児童がいることが分かった。また、実践前「読むこと」に関しては、「設問11(1,r):正答率66.7%」「設問12(g,z):正答率55.6%」「設問14(b,d):正答率77.8%」などがあつた。

実践前後の数値を比較すると、「聞くこと」「読むこと」とともに数値が上昇した。特に、「聞くこと」の「設問5(1,m,n):正答率55%→85%」、「読むこと」の「設問12(g,z):56%→79%」など、正答率が大幅に上昇した。テスト全体の正答率も、実践前が81.7%、実践後が90.8%と上昇した。

これらの結果から、事前のテストをもとに、正答率の低いアルファベットをクイズの中に意図的に取り込み、発音や形の違いについて比較しながら学習したことは、アルファベットの理解度の改善に繋がったといえる。

表1「実践前後のアルファベットテスト集計結果」

	実践前	実践後	増減(%)	選択肢	
聞くこと	1	100.0	100.0	0.0	c,n,o,p
	2	70.4	89.3	18.9	a,e,l,u
	3	100.0	100.0	0.0	a,k,s,y
	4	92.6	92.9	0.3	b,g,q,t
	5	66.7	82.1	15.5	d,g,x,z
	6	55.6	85.7	30.2	a,l,m,n
	7	96.3	89.3	-7.0	b,d,p,v
読むこと	8	100.0	100.0	0.0	c,d
	9	85.2	82.1	-3.0	b,p
	10	96.2	100.0	3.8	w,x
	11	66.7	78.6	11.9	l,r
	12	55.6	78.6	23.0	g,z
	13	81.5	100.0	18.5	l,n
	14	77.8	92.9	15.1	b,d
全体	81.7	90.8	9.1		

②アンケートの分析について

実践前後で行ったテストの実施直後に、テストに関するアンケートを行った。項目は、

- I. テスト全体の難易度とその理由（記述）について
 - II. 「聞くこと」の問題について
 - III. 「読むこと」の問題について
- に対する児童の回答を集計した（表2）。

I. 「テストの難易度」では、実践前で「簡単・やや簡単」と回答した児童は52%、「難しい・やや難しい」が48%であった。「難しい」を選んだ理由として

は、「似ている発音の小文字がたくさんあったから」「似ている形の文字や、発音が似ている文字があったのですごく難しかった」など、聞き分けることが難しい、正しい文字を選べないといった記述が多く見られた。

実践後では、「簡単・やや簡単」と回答した児童は71.4%、「難しい・やや難しい」が28.6%と、難しい旨の回答をした児童が2割近く減少した。II. 「聞くこと」III. 「読むこと」の問題についても、同様に数値が減少した。

また、実践後の理解度の変化については、実践前より分かるようになったと回答する児童が合計で89.3%と、9割近くの児童がより分かるようになったという回答を得られた（表3）。

表2 「実践前後のアンケート集計結果」

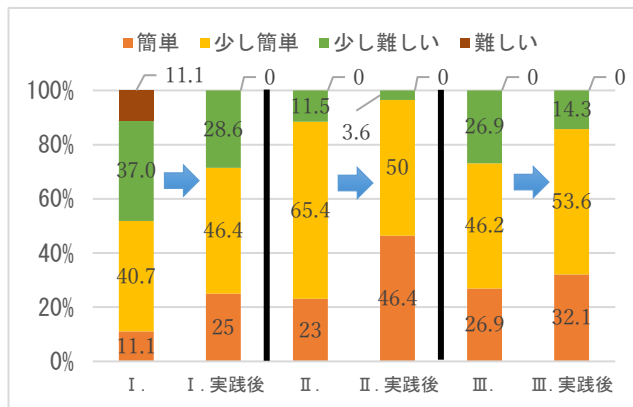


表3 「実践後の理解度の変化」

	分かる	少し分かる	変化なし	分からない
割合(%)	64.3	25.0	10.7	0.0

(3) 成果と課題

授業の終末に振り返りシート（図3）を各タブレットに配布し、学習したアルファベットを可視化できるように配慮した。記述部分では、アルファベット探しやクイズを通して身近なものにアルファベットが使われている旨の内容が多くみられ、楽しみながら体験的に学習している様子が見られた。

一方で、学びの蓄積という側面では、振り返りシートの記入に時間がかかってしまい、毎時間の振り返りを一度に確認する機会を確保することができなかった。そのため、学びの蓄積を実感する内容の記述を行う児童はほとんど見られなかった。振り返りシートの簡略化や蓄積を実感できるようなレイアウトの改善をしていくことが必要である。

また本研究を通して、音声から文字への円滑な接続には、音声学の側面から活動を考える必要があると感じた。これらの課題を踏まえ、次年度の研究に繋げたい。

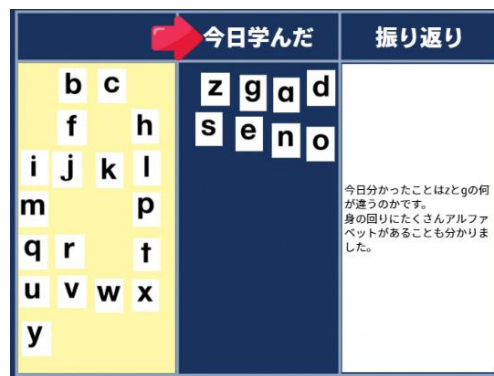


図3 「振り返りシート」

<引用・参考文献>

- ・『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』. 文部科学省. 2018
- ・塩川陽子『音と文字をつなぐ外国語学習－文字の音韻認識や形状認識を高める指導を通して－』2020. pp. 25～32.